

Robert Frost の *A Masque to Reason*

——絶対者への懐疑と人間存在の苦惱——

岩 山 太 次 郎

詩は喜びに始まり、英知に終るのである。……それは喜びに始まり、衝動へと傾むき、書かれた第一行によって方向をとり、偶然の幸運をたどって、人生の解明に終る——かならずしも宗派や崇拜のもとになるほどの、偉大な解明とはかぎらない。混乱にたいする瞬間の休止にとどまることもあろう。

Robert Frost (1874-1963) の仮面劇には *A Masque of Reason* (1945) と *A Masque of Mercy* (1947) の二つの作品があるが、本稿はその内の *A Masque of Reason* にみられる神が人間に示す「あらかじめの道理」(“before hand reason”) (p. 597) にたいする Job の疑問とそれにもとづく人間存在の苦惱の問題を中心に論じようとするものである。

A Masque of Reason は、その最後の卜書に「ここで『ヨブ記』の第43章が終る」(“Here endeth Chapter forty-three of Job”) (p. 606) とあるように、『旧約聖書』の『ヨブ記』の続篇といえるものである。しかし、これは『ヨブ記』の単なる続篇ではなく、Frost により描かれた Job は、道理とは何かを問いかけ、その結果神への懐疑を抱き、苦惱の中に存在する現代人の姿である。『旧約聖書』の Job も確かに、神に懐疑を抱き、苦惱にみちた試練の中で生きた人物ではあったが、『旧約聖書』の Job と Frost の Job にはそれぞれの苦惱と試練を経験した結果には根本的な相違がある。

もちろん、『ヨブ記』の Job の問いかけが何であったかを早急に結論づけることはできるものではない。これについては古くより様々な解釈がなされており、容易には決定しがたいものであるが、わたしは次のように考える。

Job は神の律法を厳格に守ってきたと考えていた。それ故、彼は不当に自分を苦しめる神に自分の義を主張し、身の潔白を誓い、神に挑戦する。しかし、苦しみの試練を受ける中で、彼は神が苦しみの淵にいる自分をも肯定し、創造世界の一被造物として自分を受け入れ承認するものであることを知って、神の全能を讃え、悔い改め、神を知った喜びを告白する。このように『ヨブ記』は義人の苦難の問題と、苦難の末に神の絶対性を発見することの喜びが問題となっている書である。

『ヨブ記』をこのように考えると、そこに貫ぬかれているものは啓示の宗教というものである。そして、信仰のあり方は神から人間へ向うものである。ところが Frost の *A Masque of Reason* を貫いているものは、旧約『ヨブ記』の第13章の「全能の神に物申す」とか「申しのべたい」という言葉にみられる精神によるもので、常に人間から神への疑問である。もちろん、両者とも啓示の宗教という点では異ならないが、『ヨブ記』の信仰が、神から人間への方向において完成するのに反して、Frost の方は人間から神への方向が中心になり、その結果、神を人間のレベルにまで引きもどす。したがって宗教書とは言い難い。

A Masque of Reason はわずか500行ほどの blank verse で書かれたもので、非常にヒューモラスな調子をおびたもので、神に難題をふきかけ、それに答えられない神を嘲笑している喜劇のように一見思われるものである。全篇はごく日常的な会話体で書かれており、そこには笑いや嘲笑や皮肉が満ちあふれている（たとえば、冒頭の場面では神は木にひっかかって動けないし、その玉座はプレハブのベニヤ板で、蝶番が故障していて神はそれを支えていなければならない。Job は受けた苦難からは回復している

が、時々リューマチの激痛におそわれている。最後の場面では Job の妻はコダック・カメラで神と Satan と Job の記念写真を撮影するというようなところまである)、それ以上に重要なことは、神すらからかいの神のように描かれていることである。しかしこの仮面劇の提示している問題はこういった喜劇的なものの背後にあるものである。

登場人物は、Job とその妻 Thyatira, それに神と Satan で、劇の展開する場所は沙漠のオアシス、時は現代の最後の審判の日である。

『ヨブ記』では神は第 38 章ではじめて登場するが、*A Masque of Reason* では神は最初から姿を現わす。Job と彼の妻が神に会った時、Job の心には彼がかつて受けた長くしかも激しかった試練の記憶はまだ鮮かであった。神はいやに優しく Job に元気かどうかたずねるが、Job は最早神の課した苦難には悩まされてはいないものの、神への疑問は抱きつづけている。多分神ももっとも報われてよいはずの自分の「悩める患者」(my Patient) (p. 588) を苦しめたという思いに当惑しているのであろう。神は Job にいつか会ってお礼を言おうと思っていたと言う：

わたしは千年の間あなたのことを気にかけていました。
 あなたがわたしを助けて、人間が当然受けるべき報いと
 自分の得るものの間には、そこから論証できるような因果関係はない
 という原理を恒久的にうちたててくれたことに
 お礼をいつかは言おうと思って。
 善は滅び、悪は栄えるかもしれない。
 これはわたしたちがよそおった偉大な見せかけだったんだ。
 わたしは話したい言葉を見つけたら
 すぐ話すべきだった。(p. 589)

神のこのような言葉は Job には浅薄な口実とうつつたにちがいない。

Thyatira が Job によって神に紹介された時、彼女が最初に語る言葉は「わたしは何処かであなた様を Blake の絵で見えて知っていましたわ」

(“I’d know You by Blake’s picture anywhere—” (p. 590) であった。神もうがった返事をするが、それには威厳はない：「わたしを描いたものの中では一番いい絵だと聞いている。」 (“The best, I’m told, I ever have had taken.”) (p. 590) また Thyatira の友人である witch of Endor が魔力のためだということではなぜ焼刑にされたかということにたいしても、全知でない神は、「それはわたしのノートには記録されていない」 (“That is not / of record in my Note Book.”) (p. 591) としか答えられないし、彼女の追求にたいして、

彼女はなぜまだ不正があるのかということを知りたがる。

わたしはにべもなく答える：そういうものだよ、と。(p. 592)

と弁明するだけである。

そのような神に Thyatira は、

あなた様のできることと思われることは癩癩を起すだけですわ、

道理に飢えた人間が道理を求めるときに、

もちろん、とても妙な抽象概念では

普遍的な道理なんていうものはないのです；

それに、人間以外は誰も道理があるなんてことは考えない。

あなた様は女性が観念的なプラトンになろうとするようには陥れないです。

情状酌量できる道理の組織的でない

断片がまだ沢山あるにちがいないですわ、

あなた様は忠実なものを許しても御自分を傷つけることにはならないですわね。

あなた様はそういう人たちに許しを与える必要はないという理解があったとお考えだった。

あなた様は御自分に都合がよいようにお考えだったんです。わたしはどなたとも

どんなことも同意しませんでした。(pp. 592-593)

と言う。 こういう Thyatira の感情を静めるのは神ではなく、 忍耐強い Job である。 Job は彼女にこう言う：「あなたやわたしが物事をするのに時間があるのと同じほど / 神様も時間があるのだよ。」 (“God needs time just as much as you or I / To get things done.” (p. 593)

Frost にとっては、神は「深慮のある神」ではなく、人間と同じ感受性しか持たない神として把握されている。 Job の試練やその試練により明らかにされた真理すら、神は「わたしたちは一緒にそれを手探りで捜した」 (“We groped it out together.”) (p. 595) としか答えられず、なぜ Job 自身がそれをすべて負わなければならないかという問いかけにも、神の説明は、

それは誰か他の人が負担するはずだった。

社会は物事を考え出せないのだ：

社会は物事が行為者たちによってなされるのを見ていなければならなかったのだ、

犠牲になる献身的な行為者たちによって——

わたしがそのありかを見つげられるもっとも有能な行為者たちによってなされるのを。(p. 596)

というものであって、神は Job に Job の理性に納得のいく返答を与えることができない。

確かに Job は道理への帰依者である。彼にとっては道理こそ人間の最大の関心事なのである。なぜならば、Job によれば、「道理は操舵機であり」 (“Reason is ... the steering gear.”) (p. 597) であり、人間の意志を操縦するものなのである。それがなければ人間は正しい行動ができないのである。

ところが、Job には現在操舵機が見出せないのである。Thyatira が言うように、「道理に渴望している人間は道理を求めている」 (“reason-hun-

gry mortals ask for reason”) (p. 592) のである。なぜならば、自らが受けた試練の道理を考えた結果、そこに義を見出せなかった Job は、自らが義となることがどうしてもできなくなってからでは自己の破滅を意味するから、何が義であるかを明らかにするため、今、神に助けをこわねばならないのであろう：

わたしはこの道理の問題で助けが必要なのです、
 どのような道理をわたしが同意して放棄できるかということ
 遅すぎて正しい答えが得られなくなるようなことにならない前に。

(p. 594)

したがって、苦難に満ちた自分の試練にも神の明確な計画と目的とがなければならぬと Job は考える：

あなたのしたことのあらゆる結果が単にめでたい馬鹿げた誤りだったと
 は

あなたはよもやわたしに信じさせたくないでしょう。

そのようなことをしたのでは、不信と無神論をまねくことになります。

わたしの中にある芸術家は計画が欲しいと叫んでいます。(pp. 597-598)

しかし、神が Job に試練を課したのは、Satan が神に神の子たちの神への忠誠を嘲笑して、そそのかしたからだと認める。さらに神は、Satan の尊大さを恥ずかしめるために、Job に試練を課したと言う。Job は自分が受けた試練にはそれ以上のことを期待していた：

わたしは自分が理解したもの

以上のことを期待していましたし、それにわたしが得るものは

わたしが理解できるよりもまったく少ないです。(p. 600)

Frost の Job も、『ヨブ記』の Job が考えたのと同様、神の行為も、人間の理性にてらし人間がもっている正義の規準にあわなければ、正義にはなりえないと信じていたのである。Job は神の言うことはすべて言訳であって、神学者のためにでっち上げられる「あらゆる正統化する事後にさ

かのぼる言訳」(“all the justifying expost-facts/Excuses”) (p. 597) であると考え。Job はそういう言訳ではなく、「一つでもよい、最も小さい、あらかじめの道理」(“one least beforehand reason”) (p. 597) を欲しているのである。

Job のこの言葉は一見人間中心の考えにもとづいているように思える。しかし、ここで Frost が言う「あらかじめの道理」とは、人間の理性によって得られるところのものではなく、神を信ずることにより、神から人間への交りの中にあるものであり、Job は神が今それを Job に与えていないから、神から人間への交りの回復を希願しているのである。ここでもう一度 Frost の比喩 (p. 597) を使えば、人間の意志は人間の行為の原動力としても、またブレーキとしても働くが、もしブレーキとしての意志が原動力としての意志を制御できなければ、言いかえれば、理性によって行動ができなければ、人間は他の動物と同じように、先へつっぱしるだけである。行動の原動力としての意志もブレーキとしての意志も人間存在の本質とはなりえなくなる。それ故、Frost は神による「あらかじめの道理」を求めるのである。ここにあるのは、Frost のプラグマティックな、しかも直観的な目的論である。

冒頭に引用したように、Frost は「詩がつくる表象」で、良き詩とは、愛と同じように、生を明確にして終るものである——必ずしも学派や宗派などがその上にきずかれるほどの偉大な明確さでなくてもよいが——混沌に対して、瞬間的な抑制になる程度のものに終る、と書いている。本能にまったく従ったのでは、ここで言っている明確さは生れない。それ故、Frost は Job に生の混沌を明確なものに変えさせるような行為をさせているのである。『ヨブ記』の Job は耐えがたいことを耐えることを選んだ——「どちらも同じなのだ、だからわたしは言う、全き者も悪しき者も彼は減³ぼされる、と」(第9章22節) さらに、「たとえ彼がわたしを殺すともわたしは彼を待つ。ただわが道を彼に面と向かって申し陳べたい。」(第

13章15節)そして、神が最後に Eliphaz に言われるように、Job は、「正しいこと」(第42章7節)をなすとげたのである。

しかし、神により聖者の列に加えられている (p. 590) Frost の Job は、道理と混沌を考え、混沌を形式中の形式であると言う：

……われわれに混沌と思えるものは

混乱ではなく、形式中の形式であると思います、

蛇の首にくっついている蛇の尾で、

それは永遠の象徴であり、

またあらゆるものが回り来たる道とか、

どのように光線が光線自身に輝きもどるかという象徴なのです、

あの西欧の最も偉大な詩を引きあいに出しますと。

もっともわたしは光線は無に墮落していると思いますが一——

最初は白色で、次いで赤色で、次いで超赤色になり、それから消えます。

(p. 601)

神は Job にさらに弁明を試みるが、Job は「神よ、どうか、今は十分なのです。わたしはこれ以上弁明を聞く気分ではありません」(p. 605)と言う。Job は自分が正しかったことを知っているのである。そして、われわれは最後には「新しい数々の考えに目がくらんで立っている」(p. 605) Job の姿を見るのである。しかし、われわれには「新しい数々の考え」が何であるかは明らかではないし、それどころか Job が本当に「新しい数々の考え」をはっきりと掴んだかどうかとも明らかではない。

ここにおいて、われわれは *A Masque of Reason* には Devil が存在している意味を思いおこさなければならない。Thyatira が神に誰が地球を創造したかをたずねた時、神はこう答えた：

それが表わすどんな独創も

悪魔の仕業だった。悪魔は地獄も、

あらゆる独創の中の独創的なものである

誤った前提も、天使も倒した、
 罪も彼が発明したのだ、Wolsey ならそう言っただろう。
 地球については、わたしたちがそれを共同で探し出したのだ、
 あなたの御主人の Job とわたしが一緒に
 人間が最も必要としている戒律は
 人間が不道理に服従することを学ぶことだと発見したのと同じように…
 (pp. 596-6)

この答えの意味は Job にもすぐには明らかでなかった。しかし、神が、なぜ Job に試練を課したかという理由を、「わたしが Job に苦しみを課したのは、たんに悪魔にたいする見せびらかしからだった」(“I was just showing off to the Devil.”) (p. 600) と言うにおよんで、Job は先きほどの神の Thyatira への答えが、Satan を受け入れることを意味するものであることを知るのである。Job は神の中に人間的な理性が働いていることを知るのである：

あなたは人間的でした。わたしは自分で理解したもの以上の
 ことを期待していましたし、それにわたしが得るものは
 わたしが理解できるよりもまったく少ないです。
 でもわたしは気にしません。それがありのままでありたっているように
 放っておきましょう。

要はそれはわたしには関わりあいのないことです。(p. 600)

Job はすべてを明確にすることを望んではいたが、神の「最高のインスピレーション」(p. 604) である Satan は、神にとっては欠くことのできない存在であり、その Satan を自分が受け入れることは必ずしも道理に反することではないと考える。神は Job の妻に、

あなたの御主人の Job とわたしが一緒に
 人間が最も必要としている戒律は
 人間が不道理に服従することを学ぶことであった。(p. 596)

と語ったことがあるが、今 Job も不道理に身をまかせることを学んだのである。

ここで重要なことは、Job の不道理への身のまかせ方である。神と人間との間に理解があって、不道理に身をまかせることを学んだのではなく、神の言葉が Job には弁明としてしかうつらなかつた中で、Job は不道理に身をまかせなければならなかつた。そのため、この仮面劇の最後の言葉は、「今もしあなた方三人が何か取り決めをしたのでしたら / この場合にはしかめ面をするよりは、微笑むことになるでしょう」(p. 606) という Thyatira の言葉で終わっているように、神も Job もつくり笑いをしなければならぬのである。おたがいの間に完全な理解のなかつた Job は、絶対の神を人間と本質的にはなんらかわからないものに引きおろすことによって、不道理を受け入れたのである。Job は最早、神を『ヨブ記』の Job のようには「自分を否定し、塵灰の中で悔改め」(第 42 章 6 節) ることはできなく、神の道理を穢している (“we disparage reason.”) (p. 596) という自責の念をもちながらも、神の絶対性、神の人間に課す道理があることを疑いつづけることになる。

神も人間にたいする自分の道徳的束縛から自分は解放されたと思っている。神はこの仮面劇の最初の部分で Job にこう語りかけている：

わたしがあなたに感謝するのは
人類にたいするわたしの道徳的束縛からわたしを解放してくれたことで
した。

最初の唯一の自由意志は人間のそれで、
人間は自分の選択のままに善も悪もすることができました。

.....

あなたはそのすべてを変えてしまったのです。あなたはわたしを自由に
統治するようにしたのです。

あなたはあなたの神の解放者です。(p. 590)

しかし、神の解放者とはなっても、また、不道理を受け入れても、神との間に完全な理解をもちえなかった Job は、自分が何処にいるのか、自分が何者であるかも分らない。多くの現代人と同様の懐疑のさまよいつづけなければならない：

われわれは自分たちが何処にいるのか、自分たちが何者であることを知らない。

われわれはおたがひ同志も知らない…… (p. 598)

『旧約聖書』の Job は神から与えられた苦悩に満ちた試練を通して、神への信仰をそれ以前よりも強い本当のものにすることができた。しかし、現代の Job の神への問いかけは、以前よりもより強い懐疑を Job に残している。Frost はこの仮面劇で神の絶対性あるいは信仰の問題に解答を与えようとしているのではなく、神の「あらかじめの道理」と不道理の問題を展開させることにより、われわれに神、信仰、人間存在の問題の本質を示そうとしているのである。神が苦悩に満ちた Job の問いかけにたいしてなんの解決をも与えていないからといって、あるいは、作品全体に嘲笑や揶揄がみち、その調子が非常にヒューモラスに書かれているからといって、Frost は決して冗談めかして書いているのではないし、神を否定しているのでもない。それどころか、Frost は真面目な深刻な問題を提示しているのである。Job の問いかけた問題は正に「人生の解明」へのそれであったわけである。しかし、われわれの得た解明は「偉大な解明」ではなく、冒頭に引用した Frost の「詩がつくる表象」で述べているような、「混乱にたいする瞬間の休止」として、われわれに人間存在とその苦悩を再考させるものであると言えよう。

注

- 1) Robert Frost 著、安藤一郎訳、「詩がつくる表象」、『現代アメリカ詩論大系』

・〔世界詩論大系一1〕；東京：思潮社，昭和39年），p. 10.

- ② *A Masque of Reason* よりの引用は，*Complete Poems of Robert Frost* (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1962) により，以下拙訳のあとに頁数を記す。

なお，必要と思われる箇所には原文を本文中に付す。

- ③ 『ヨブ記』よりの引用は，関根正雄訳『ヨブ記』（岩波文庫；東京：岩波書店）昭和46年により，本文中に頁数を記す。